

遠い旋律

結城昌治

中英公論社

遠い旋律

七八〇円

昭和五十四年五月十日印刷
昭和五十四年五月二十日発行

著者 結城昌治

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六)五九二一

振替東京二一三四

校印廃止

©一九七九

遠い旋律

一

手術が終わって病室へ運ばれ、それから三十分くらい経っていた。

「厭よ、厭——」

比呂子は必死で叫んだ。

しかし、比呂子はそのことを憶えていない。手術をするときの麻酔がまだ効いていたのだ。だからどんな夢をみたのか、どんな謔言うそごいを言ったのかも憶えがない。

さらに三十分あまり経った。

「利根さん——」

呼ぶ声をした。

比呂子はうっすらと眼をあけた。

若い看護婦の顔がおぼろげに浮かんだ。

比呂子の姓は夏川で、利根ではなかった。だが、妊娠中絶同意書には「利根比呂子」と書き、配偶者の欄には利根高史が自分で名前を書いた。入籍していいだけで、比呂子は結婚したつもりでいたし、利根の気持も同じはずだった。

「無事にすみましたからね。もう心配しなくていいのよ」

看護婦の声はやさしく聞こえた。

「ありがとう」

比呂子はベッドに横たわったまま、軽く頭をさげるように言った。意識は少しはっきりしてきたが、体がしびれているようで呂律がまわらなかった。

看護婦が去ると、比呂子はまた深い眠りに落ちた。

それから、どれくらい時間が経ったろうか。

比呂子はふっと眼をさました。

音楽が流れていた。陽気な、しかし哀愁をふくんだギターだった。

どこかで聞いた覚えがある。

比呂子はしきりにその曲を思い出そうとした。

病室は二人部屋で、となりのベッドとはベージュ色のカーテンで仕切られていた。ギターの音楽はカーテンの向こうのラジオから流れているようだった。

比呂子はどうしてもその曲を思い出せなかった。随分いろいろな夢をみたような気がするが、

それらの夢もきれいに忘れている。

そのうち、利根高史の姿が見えないことに気づいた。ずっと付き添っていてくれる約束で、帰日も送ってくれることになっていた。

比呂子は腕時計をみた。

二時半だった。

手術室に入ったときから四時間近く経っていた。医者の話では、手術は十五分くらいで終わったはずである。

ギターの演奏は別の曲に変わった。

利根はどこへ行ったのかしら。待合室で煙草でも飲んでいるのだろうか。

比呂子は薄暗い天井を仰ぎ、利根のことを考える一方で、わずか三ヵ月たらずで摘み取られた幼い生命のことを思っていた。比呂子が望んだ手術だが、その生命には利根の愛情がこもっている。

比呂子は急に悲しみがこみ上げてきて、涙が溢れ、頬を濡らした。利根が生んでくれと言ったのに、比呂子は正式に結婚しないうちに妊娠して生むなんて厭だと言ったのだ。式は挙げなくても、せめて披露パーティをして、妻として籍が入ってから利根の子を妊りたかったのである。古風かもしれないが、比呂子は結婚生活の出発点を大切にしかかったのだ。

利根はまだ戻ってこない。

比呂子は枕もとのブザーを押して、看護婦を呼んだ。

「主人はどこかしら」

顔馴染みになった看護婦にきいた。

「お帰りになりました」

「帰った——」

比呂子は思わず聞き返した。

「はい、先へ帰ったとお伝えするように言われました」

「何時頃帰ったの」

「二時間くらい前です」

「急用ができたのかしら」

「さあ——」

看護婦は何も聞いていないと言った。どこかへ電話をかけた様子はないし、電話がかかってきたということもなかったらしい。

小さな産婦人科医院で、白髪のきれいな温厚そうな医者と、看護婦は二人しかいない。

「あたしも帰ります」

比呂子は体を起こした。

「大丈夫ですか」

「はい」

「もっと、ゆっくりしていいのよ」

普通なら、術後の経過をみるため翌日まで入院していたほうが無難である。

しかし、個人経営の医院などではその日のうちに退院する者が大半だった。手術後三、四時間で退院する者も珍しくない。

比呂子は手術のとき貸してもらった寝巻きを、スーツに着替えた。

そこへ、看護婦と入れかわりに医者が入ってきた。

比呂子は「はい」に礼を言った。

「痛みはありませんか」

「少しありますけど」

「そうでしょうね。麻酔がきれたせいです。でも、明日は痛みも取れますよ。出血も少量なら心配いりません。とにかく、注意書をよく読んで、一週間したら診察にきてください」

注意書は、十日ほど前に初めて診察をうけ、妊娠しているとわかったとき渡されていた。それは一枚の青い紙きれで、手術前の心得とともに、術後三日間は安静にしていること、アルコール類は出血が多くなるので控えること、一週間は入浴禁止だが、シャワーは三日以後なら構わない、ということなどが印刷してあった。

「赤ちゃんは男の子だったのでしょうか、それとも——」

「いや、胎児といっても三ヵ月ですからね、まだ人間の形をしていないし、男女の別もわかりません」

四ヵ月以上なら男女の別がわかることがあって、死産届を出して埋葬許可証も必要になる。しかし、その以前はそんな必要もなかった。医者は説明を避けるが、排泄物と同じに処理されてしまうのである。

「もう済んでしまったことで、そういうことはあまり考えないほうがいい。あなたは二十三歳でしょう。まだ若いじゃないですか。赤ちゃんが欲しくなったら、いつでもまた妊娠できる。くよくよ考えるより、体を大事にすることです」

医者は比呂子のような質問に馴れている様子だった。

比呂子は帰り支度を済ませると、薬局の窓口で薬をもらった。手術費は前払いで、利根が払ってくれていた。

比呂子は医院の玄関を出た。

灰色の雲が垂れこめて、風が冷たかった。

明日から三月だわ。

比呂子はコートの襟を立て、自分を元気づけるように胸の中で呟いた。

しかし、なぜ高史は先へ帰ってしまったのだろう。

比呂子の胸の中は、呟いた言葉と反対に、不安が広がってゆくばかりだった。

比呂子はタクシーでアパートへ帰った。畳の部屋は六畳一間きりだが、キッチンとトイレにシャワーがついている。けさは利根が迎えにきてくれて、この部屋からいっしょに産婦人科医院へ行ったのだ。そのとき、彼が途中で帰るなどとは、ひとことも言っていない。

利根高史はカメラマンだった。一般には知られていないが、ファッション界や広告業界では多少名前が売れていた。ある婦人雑誌のグラビアを撮るため、比呂子が勤めている美容室からヘア・デザイナーとして派遣されたとき知り合ったのである。初めから利根のほうが積極的で、会う場所も仕事を離れて喫茶店やスナックへ変わり、比呂子の気持も、利根のプロポーズを受けられるようになっていった。彼のアパートに泊まったときもごく自然で、何の抵抗感もなく、愛する男に巡りあえた喜びに浸った。

それが約半年前である。

比呂子は小さい頃から髪をいじることが好きだった。髪を編んだり解ほどしたり、買ってもらった人形の髪にもすぐ指をのぼし、そうしていればたちまち一日が経った。だから美容師になるのはひとつの夢だったが、美容院を開こうというほどの意欲はなかった。幼いうちに両親を失い伯父の家で育った彼女のもっと大きな夢は、恋をして、結婚して、子供を生み、幸福な家庭をつくる

ことだった。それは平凡な夢かもしれないが、美容師という職業について周囲の人間関係をみていると、簡単に実現できる夢ではないことがわかってきたのである。だから結婚したら、彼女は仕事をやめるつもりで、利根も賛成してくれていた。結婚披露の準備ができてから同じ家に住みたいというのは彼女の希望だが、それがのびのびになっているのは利根の都合だった。ポスターをつくるため外国へ行く仕事がつづいたせいで、しかしその仕事も三月中には一段落する予定だった。すでに新居となるアパートも利根が見つけてきたし、四月そうそうにも友だちを呼んで賑やかな披露パーティをしようと話合っていたのである。

比呂子は心臓がドキドキしてきた。じっとしてられないような不安だった。自分でも不安の正体がわからない。

利根のアパートへ電話をかけてみた。

呼び出しのベルが鳴るばかりだった。

比呂子は受話器を置いた。

利根はフリーのカメラマンで仕事場が一定していないが、連絡場所が必要なので、マイナス・プロという事務所を数人の仲間たちとつくっていた。マイナスの札ばかり切っている連中という意味だが、経済的にはマイナスでも自分のやりたいことをやるという自尊心をこめていた。仕事の連絡場所というだけだからスタジオや暗室などもなくて、六本木の裏通りの小さなマンションの一室にすぎない。

比呂子は念のためマイナス・プロにも電話をかけてみた。しかし利根はいなかった。きょうは仕事を全部外したはずなのである。彼がそう言ったのだから間違いないだろう。

電話のダイヤルをまわすとき気づいたが、鏡に写った顔が青ざめていた。うすくひいたつものの口紅もどぎつい色に見えた。彫りの深い顔も頬が痩せこけたせいのように見える。長い栗色の髪も乱れていた。いつもなら気になる乱れだが、そのまま顔をそむけ、ネグリジェに着替えた。下腹部に鈍痛が残っていた。

ベッドに横たわると睡気がおそってきた。

利根はなぜ先へ帰ってしまったのか。いったいどこへ行ったのか。なぜ電話もくれないのか。比呂子は眼を閉じ、いっしんに考え呟きつづけた。そしていつの間にか眠った。

やはり手術で疲れたのである。

しかし、雷の音で間もなく眼がさめてしまった。地ひびきを伴うような凄惨な雷鳴だった。薄暗い窓に稲妻が走ったかと思うと雷鳴がとどろき、烈しい吹き降りの雨が窓ガラスを叩きつけた。

比呂子は不吉な予感がした。利根の身の上に兇事があったのではないかという予感だった。

それとも、兇事は比呂子を襲おうとしているのだろうか。

比呂子はまたじっとしていられない気持になって、体を起こした。

そのとき電話のベルが鳴った。

野上悟郎からだった。以前は女性週刊誌の記者だが、いまはアンカーといって、取材記者が集

めてくる原稿を一本の記事にまとめる仕事をしていた。無署名のコラムなどもあちこちに書いてあるが、フリーのライターで、どの社にも所属していない。比呂子が彼と知り合ったのは、利根高史より古かった。

しかし最近、麻雀のメンバーが足りないときに誘われるくらいで、あまり会う機会がなかった。比呂子は麻雀が下手だし、好きでもないから、そんな誘いをうけるときは大抵彼と利根がいつしよにいるときだった。比呂子と仕事上の関係は、彼の退社とともに切れている。

「すごい雷だな」

柔道三段という体格が、誰にでも想像できるような太い声だった。

「まだ鳴ってるわ」

「こっちもだよ、あっ、また光った。いまに鳴るぞ」

野上が言ったとおりだった。

炸裂するような音が鳴りわたった。

「怖くないかい」

「怖いわ。あたし、雷って嫌いなものよ」

「ほくだって好きじゃないが、天変地異という感じは悪くない。地球最後の日なんて、待ってましたと言いたいよ」

「あなたはいつもそんなことを言ってるわ」

「ところで、利根に連絡がつかないかな」

「急用なの」

「いや、彼がぼくを探してるらしいんだ。ぼくは出かけてたんだが、何度も電話をかけてきたらしい」

野上は母親と二人暮らしだった。その母親が電話を受けたのである。

「あたしには電話がなかったわ」

「仕事の予定はどうなんだろう」

「きょうはないはずよ」

「それじゃ麻雀の誘いかな」

「そうかもしれないわね」

「それならそれで構わない。どうせぼくは仕事が残ってるんだ。でも、白坂万理の電話番号を聞いたというのが少し気になる」

「あなたのお母さんに聞いたの」

「うん、ぼくも知らないのに、おふくろが知るわけないけどね。彼女の電話番号なら、きみに聞けばわかるじゃないか」

「あたしも出かけていて、ついさっき戻ったばかりなのよ。白坂さんに電話をしてみるわ」

「利根から連絡があったら、ぼくは家にいると伝えてくれないか。ただし、麻雀の暇はない」

「わかりました」

比呂子は電話を切った。

白坂万理は美容学校の同期生である。いちばんの仲よしで、青山と新宿に店があるアン渡辺美容室へ勤めたのもいっしょだった。色白の人形のような美人で、彼女自身がモデルになってもいいくらいだが、美容師としてのセンスもいいし、ファッション雑誌や婦人雑誌では比呂子より彼女のほうが仕事の機会が多かった。いずれは自分の店を持つつもりなのだ。比呂子の夢が愛情につつまれた家庭なら、万理の夢は一流のヘア・デザイナーになることだった。性格も几帳面な比呂子と正反對だが、それで却って気が合っているのかもしれない。利根高史とはもちろん仕事の関係で知り合っていたし、比呂子の親友としてもよく知り合っている。

だが、利根はなぜ白坂万理の電話番号を聞こうとしたのか。比呂子は新宿店勤務で、万理は青山店勤務だが、火曜日は両店とも定休である。だから店に問い合わせることはできなかったのだろう。

しかし、比呂子に聞けば簡単にわかることを、どうして聞こうとしなかったのか。未だに電話一本くれない理由もわからない。あんなに手術を心配してくれていたのに、麻酔で眠っている比呂子を置き去りに帰ってしまったきりなのだ。利根らしくないのである。

比呂子はますます不安だった。

万理のアパートへダイヤルをまわした。